

皆に知ってもらいたい効果検証の話(第一回)

# 「再犯しやすい」ってどういふことか? — 根拠をもって矯正の実務を説明する —

矯正研修所効果検証センター 原 吉田花恵  
矯正研修所効果検証センター 田 杏子

## 一 はじめに

「効果検証」、「エビデンス」という言葉を聞いて、皆さんはどんなイメージを浮かべるでしょうか。こうしたことに関心があり、矯正における様々な調査・研究を思い浮かべる人も中にはいるでしょうが、多くの人にとっては、なじみにくい印象かもしれません。今回から、全四回の連載を通して、矯正における効果検証やその実務との結び付きをテーマに、日頃の業務に役立つ見方や考

え方を解説していきます。矯正における効果検証の対象は、大きく分けて二種類あります。一つは、文字どおり「処遇の効果」です。少年院や刑務所で行われる各種改善指導やプログラムに、どの程度効果があるのか、統計的根拠を示すことを目指すもので、詳細については連載の次回以降に取り上げます。もう一つは、効果的な処遇の前提として、手を入れるべき課題等を特定する「アセスメントツール」です。矯正施設で使われているツールの質を維持・向上させるための取組も、効果検証の側面の一つです。(早速、カ

タカナにうんざりした人もいるでしょうか。ヘッドギアを頭部保護装置等と呼ばないと同じようなものとして、御了承いただければと思います。

今回は、アセスメントツールについて紹介します。これは、いくつかの調査項目を用いて再犯防止等に向けた課題を整理し、可視化するもので、その評定結果は、処遇や介入の方針を検討する際に重要な役割を果たします。代表的なものとして、成人矯正では「Gツール」、少年矯正では「MJCA」が使われています。両ツールでは、再犯(再非行)しやすさが四段階のレベルで示され、再犯(再非行)につながり得る課題がどこにあるかを確認することが出来ます。



これらのツールを使いこなす上でぜひ知っておきたいのが、「再犯しやすい」とはどういうことか」という点です。本稿では、この疑問に答えつつ、根拠をもって処遇や教育の方針を検討・説明することの大切さについて、主にGツールを例に挙げて考えていきます。

## 二 「経験頼み」であることの限界

(例)採用三〇年目のベテラン刑務官のAさんは、大規模拘留所に勤務しています。受刑者の言動を見ていれば、犯罪傾向が進んでいるかどうか、感覚的に分かるようになったと感じています。今年、Aさんは分類担当となり、Gツールの結果を目にする機会が増えました。しかし、「こんなツールに頼らなくても、受刑者をよく見ていれば、再犯しそうかどうかは分かるだろう。」と思いい、Gツールをわざわざ実施することには疑問を感じました。

この例のように、確かに、Aさんほどの経験がある職員ならば、ツールに頼る必要はないと感じるかもしれません。しかし、受刑者の再犯の可能性を他の組織に説明するとしたら、どうでしょうか。

図1を見ると、過去

<p>説明① (専門的な知識や経験を重視した説明)</p> <p>「経験豊かな職員による細やかな分析に基づいて、処遇方針を検討しています。」</p> 	<p>説明② (客観的な再犯予測を重視した説明)</p> <p>「過去のデータに基づいて、客観的に再犯の可能性を予測し、その結果を参考にしながら、処遇方針を検討しています。」</p> 
--	---

両方あった方が説得力が増す

図1 対外的な説明の2つの方法 (処遇方針の検討について)

のデータや客観的な予測を重視した説明もあった方が、多くの関係機関、そして国民の理解や納得を得やすい説明になると言えます。

### 三 客観的な再犯予測の仕組み

過去のデータに基づいて、客観的に再犯の可能性を予測することは、図2のとおり、天気予報の「降水確率」の考え方に似ています。天気予報では、様々な気象条件の下で雨が降ったかどうかという過去のデータに基づいて、予測の方法を考案し、将来（例えば、明日）の雨の降りや

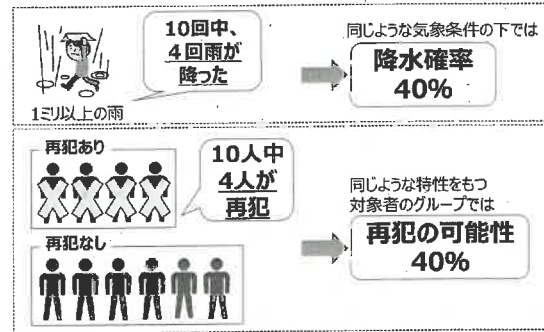


図2 過去のデータを活用した予測の考え方（降雨及び再犯の予測）

すさを予測します。これと同じように、受刑者についても、犯罪につながりやすい様々な条件の下で再犯に至ったかどうかという過去のデータに基づいて、予測の方法を編み出し、将来（Gツールでは、出所後二年以内）の再犯しやすさを予測しているのです。<sup>1)</sup>  
このような例を出すと、「天気予報は外れることがあり、頼りにならない。」と考える人もいるでしょう。確かにその通りで、再犯の予測も「外れる」ことがあり得ます。受刑者の再犯には、出所後の人間関係や就労先の環境など、刑事施設内で把握しきれない事柄が数多く影響しており、Gツールだけで完璧な予測をすることは不可能だからです。

### 四 Gツールを処遇に活用する

Gツールでは、個々の受刑者の再犯のしやすさが、再犯リスクレベルとして示されます。<sup>2)</sup> 具体的には、LV（レベル）1からLV4までの四段階のうち、どこに該当するかが出力され、LV1であれば、再犯の可能性が「特に低い」、LV2は「低い」、LV3は「高い」、LV4

は「特に高い」ということになります。

この出力結果は、犯罪傾向の進捗（A・B）を判定するときの基礎資料となります。ある処遇施設の受刑者のGツール実施結果を見て、どれも似たり寄ったりな結果だと感じるのは当然の話であり、現行の運用では、Gツールで再犯の可能性が低いと示される者の多くにA指標が、高いと示される者の多くにB指標が付されるようになっていのです。他方、初入の受刑者であっても、Gツールで再犯の可能性が「特に高い」と示されると、B指標が付される可能性があり、それだけ、Gツールは処遇の方向性に関わるものであると言えます。

また、Gツールでは、各種改善指導等の受講の必要性が★の表示数で示されます。<sup>3)</sup> こちらも、科学的根拠に基づいて算出されており、処遇を選択する上で重要な判断材料となっています。

### 五 根拠を適切に活用するには

#### (一) 科学的根拠と臨床的判断を組み合わせる

ここまで、科学的根拠をもって説明することの大切さについて述べてきました。もちろん、実際に処遇方針を決定したり、矯正の取組を関係機関に説明したりする場面では、科学的根拠のみで説明しきれない部分もあります。特に、Gツールなどのアセスメントツールの結果は、本稿で紹介したような仕組みや限界を踏まえて活用する必要があります。科学的根拠に加え、先の例で示したベテラン刑務官のAさんが持つような経験知など、職員の臨床的判断も活用することにより、多くの人の理解を得られる説明を目指したいものです。

#### (二) ツールをよりよい状態に保つ

一流の料理人が包丁の手入れを欠かさないと同じように、GツールやMJCAなどの「道具」も、よい状態を保つことが大切です。評定担当者にとっては、評定手引等を読み返したり研修を受けたりしてスキルアップに努め、安定して正確な評定ができるようにしておくことも、大切な仕事の一つです。

また、両ツールはいずれも平成二〇年代に法務省において開発されており、開発に用いられた過去のデータが

次第に古くなっていくという課題もあります。そこで、効果検証センターでは、矯正局から依頼を受けて最新のデータを集め、再犯等の予測精度が鈍っていないかを確認する統計分析等を実施しています。こうした手続を踏むことで、GツールやMJCAなどの「道具」は磨かれていき、安心して活用することができます。

## 六 終わりに

GツールやMJCAを見ると、再犯（再非行）しやすさには、本件の罪種や施設歴など、処遇によって変わりが得ない側面が関係していることが分かります（これを、「静的要因」と呼びます）。一方、矯正処遇や矯正教育が効果を発揮するには、処遇によって変わり得る側面（これを、「動的要因」と呼びます。）に注目することが非常に大切です。現行のGツールは静的要因のみを扱っていますが、令和六年度の改訂において動的要因等が追加され、今まで以上に活用の幅が広がっていくことが期待されています。

(1) Gツールが予測の対象とする「再犯」は、比較的軽微なものから重大なものまでひとまとめにされている。したがって、起こり得る再犯の質（重大性や常習性等）までは予測できない点に注意する必要がある。

(2) 現行の「Gツール2017」では、「再犯リスクレベル」と表示されているが、令和六年度から運用される「Gツール改訂試行版」では、「静的リスクレベル（再犯の可能性の評価）」と表示される予定である。両者は同じものを指し、算出する計算方法も同じである。

(3) 現行の「Gツール2017」では、「受講必要性」と表示されているものが、「Gツール改訂試行版」では、「改善指導受講優先度」として表示される予定である。いずれも、段階が高くなるほど、★の表示数が増える。